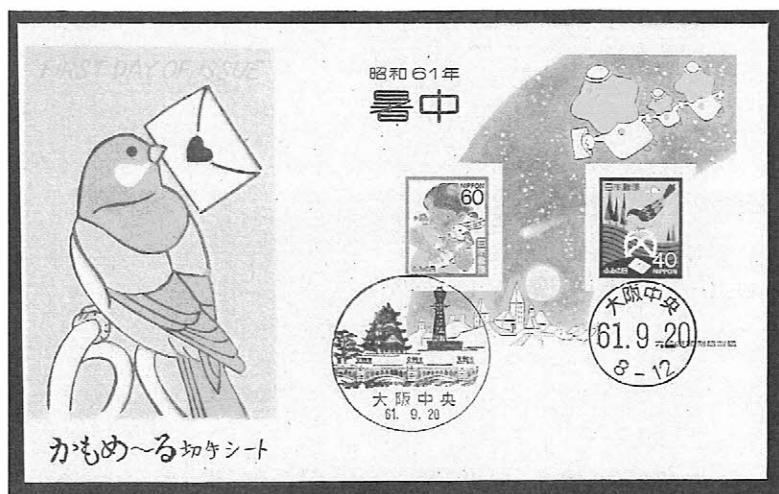


本題に入る前に、私の切手収集の原点等をお話しさせていただきます。

私が切手収集を始めたのは11才のころ、小学生5年生の頃だったと思います。未使用で、子どものこずかいの範囲でのささやかな趣味です。当時は、水前寺競輪場通りの路地裏にある切手屋さん『マエジマ』スタンプによく通ったものです。壁にカタログが貼ってあり、切手が小袋に入っていてワクワクしたものです。中学生・高校生・社会人となり、切手収集は継続し現在に至っているところです。やがて未使用での収集は、行き詰まりを感じるようになってきました。そんな時に内野さんと知り合うきっかけがありました。昭和の最後の頃でしたから、もう30年以上の付き合いということになります。YWの告知コーナーで、郵趣会を立ち上げませんかという記事を読み、連絡を取り合いました。先ず2人で東バイのトライアングルという私の行きつけの喫茶店で郵趣談義に花を咲かせたものです。

やがて、時は流れ「平成」となりました。元旦には、年賀印を記念押印するために中央郵便局に毎年通いました。当時は、窓口年賀印が置いてあり自由に押印することができました。記念切手の発売日には、やはり中央郵便局にて購入するために2人して待ち合わせしたものです。そこで細井さんを毎回見かけるようになったので、内野さんが声掛けして仲間となり3人で行動を共にするようになったところです。2人の収集内容に刺激され、使用済み切手も収集するようになりました。単調になりやすい収集にここでFDCが登場します。最初は、JPSカバーを頒布会に入会してスタート。しかし、1枚貼りの特印押しより鳴海スタンプの4枚貼り多局印押しなど、段々と目が肥えてくるとJPSカバーでは満足感が得られません。版元も特にこだわりもなく、気に入ったものだけ集めました。



今回は私の収集品のなかからお気に入りの2点を紹介します。

松屋版の「高校野球50年」「ふみの日 昭和61年小型シート」です。

和紙封筒に1枚貼りで特印押し、公園などのペア貼りで和文印・特印もしくは風景印押しが基本です。切手デザイナーがカシェも担当し、I版・II版があります。1950年の「文化人切手・市川團十郎」から制作されています。ほかにも、瀬戸口版・渡辺版・印刷局凹版（清水凹版）など有名な版元はいろいろあります。

次に、カバー愛好家なら1枚は持っていたいルイスカバーを披露します。

カール・ルイスは、1865年ケンタッキー州生まれ。船乗りでしたが、1901年に横浜に定住し写真館を営みました。

昭和の初期、日本初のFDC制作の版元となった先駆者カール・ルイス。当時の日本では、カバー収集がまだ定着していなかった時期、FDCや季節局カバーを制作。顧客は主にアメリカ人で、日本を表現するために富士山のカシェを肉筆画で描いた物を制作しました。

1934年、初めての肉筆画初日カバー・芦ノ湖航空切手を制作しています。1件につき50~200通程度制作されて、総数で23,000通が制作されました。そして、1941年大屯・次高国立公園が最後のFDCとなり、1942年に永眠いたしました。カバー愛好家なら誰もが憧れるルイスカバー大切にしていきたいと思います。

